

日本臨床心理学会第 55 回東大阪大会のお知らせ

日時: 2019 年 8 月 31 日(土) ~ 9 月 1 日(日)

場所: 近畿大学(東大阪キャンパス) 東大阪市小若江 3-4-1

対話と反想、オープンダイアログとリフレクティングは、 社会的排除と差別に対してなにができるか? [続きで刷新版]

大会準備委員長 滝野 功久

今回は、昨年の大会が台風で未消化な形で終わったことを、改めてやり抜くものです。もちろん同じことをするのではなくヴァージョン・アップをして、やり方も内容も、色々工夫したいと考えています。

前回以上に全体をグループで行うワークショップ方式にします。そこでできるグループは、集まって来る人々によってまた大きく変わって来ますので、たとえ類似のプログラムでも、相当にちがった展開になると思います。

そして、大会の直前には、反想法(リフレクティング)の実際を具体的に体験できる簡単な研修を大会とは別途に用意したいと考えています。これについては、予定が決まり次第、改めてネットを含めてお知らせいたします。

この大会のカギとなる「オープンダイアログ」と「リフレクティング」は、ご存知の方も多いと思いますが、北欧の精神科医療保健活動や家族療法の実践の中から生まれてきたもので、大変厄介と考えられていた精神障害の危機的状況に対しても、薬物や拘束と介入をほとんど使わずに、大きな成果を確実に出していることで、数年前から世界的にも注目されてきているものです。

しかし、オープンダイアログと、特に「反想」=リフレクティングは、それが生まれて来た領域・分野にとどまることなく、対人援助全般はもちろん、組織刷新・地域活性化・紛争解決、そして持続可能な社会のための市民運動など、実に広範な領域においても活かせるものです。さまざまな問題・課題に対して、現場の課題に合わせて、工夫しながら色々応用して使うことが可能ということです。

ただし、それらを対象操作のための手法としてだけ捉えてしまうと、最初はどうも行くともすぐに有効でなくなり、見向きされなくなって行くに違いありません。このことを実はかなり心配しています。反想=リフレクティングは、確かに手法的側面があり、何度も実地で訓練して、身につけて行くものです。しかし、同時にその土台には、課題に対しての《人と人との対等性》や、《環境と文化の多様性を尊重する》思想、近代の搾取と競争を超える《脱人間中心のエコロジー的発想》などがしっかりとあります。それらを深く理解しないでは、これまで外から導入された多くの新しいものと同じく、表面的な形だけのものになってしまいます。それでは、現場のなかでの応用はもちろん、社会に変化をもたらすような展開は難しいと思います。それでなくとも既存の体制からの無視・黙殺あるいはすり替えといった大きな抵抗は、しつこく続くにちがいありませんから。

これまですでに何度も言いましたが、オープンダイアログによる対話や反想法=リフレクティングは、私たちが当然として来た専門家のあり方や臨床心理(学)の通念をはるかに越えて、セラピーや個と集団のパラダイムをひっくり返す力を秘めています。問題は個の内部の病巣から現れていて、それに対して早期に有効な治療を施すと云った従

来の医学的モデルでコトを視ないのはもちろんですが、問題の正確なアセスメントと有効な対処法の立案とその効果的な実現こそを（あるいは、だけを）専門家の仕事ととらえることにも、疑問符を付け加えます。と言っても、そういう役割の専門性は不必要と言うことではありませんが。

問題を個人と責任とにすぐに結び付けしないで、問題そのものとして外に出してみることで、個々人の歩んできた道のりを常に大切にとらえながら、人と人ばかりではなく、人と自然や、人との関係のなかで、今ある事態を考え、与えられた枠組みとは別のものからみれば、どのような物語が可能なのか、そうしたことに関心を抱きます。その意味で、エヴィデンス・ベースドの発想とは別のナラティブ・アプローチの実践でもあります。

このアプローチは、出現すること（たとえば症状）の数値化に努力するよりも、周りとの対話と交流を通じて、もっと違った見方や発想をいくつも呼び込んだり汲み取ったりすることに、そして体験を味わうプロセスに、一層の関心を注ぎます。場面や言葉をかえてみることで何が違って来るか試してみることも積極的にやります。ミスやエラーがあっても小さな逸脱があっても構わないとして、ちょっとしたことでもよしとして新しいことを次々に試みようとするものです。するとタイミングが合えば、一挙に新しい窓が開くことがあります。そうでなくとも、最初はわずかでも、継続するなかで着実な変化を生み出して行きます。

大会自身がそうした機会として活かすことを願っています。これを読み、大会に参加しようとしている方にとって、ここに参加すること自体が、ほんの少しでも何かの新しい出発点として感じ取られるようなものにする、それを一緒にできればと思っています。

日臨心では、2年前の茨城大会では斎藤環さんを招いて、オープンダイアログをテーマにしたワークショップ・全体会をしました。私自身も、オープンダイアログで使われている反想法＝リフレクティングなどを活かしたワークショップを京都と東京を中心に続けてきています。これまでの展開をみますと、それなりの成果を得てきていますが、現実にその実践の広がりや深まりにおいては、心配なことも結構あります。上に書いたことだけでなく、その発想や手法が、シンプルであるために、すぐに分かったつもりになってしまうことが結構多いということもその一つにあります。

そうしたことも踏まえて、今回の東大阪でのワークショップを中心とした学術大会は、初めての人にも、既にかんりの体験をしている人にも、大きく意味ある、今後を楽しみにできるものになりたいと強く願っています。そのために不可欠なことは、**参加・反想・共有**です。

このほかにも「ヒアリング・ヴァイシズの現在と課題」「当事者研究」「ポスター発表」を準備しています。下に、前回大会に沿った仮のプログラムを載せますが、これはたたき台で、これからいろいろ変更・修整して行くものです。普通だと、今の時点でこんな状態で大丈夫かと言われそうですが、OKです。**オープンダイアログとオープン・スペース・テクノロジー（OST）*の精神**でやって行きますので、あらかじめキッチリと決め過ぎないこと、これこそが一番大切なのです。

皆さんからの提案などと対話をしながら準備して行きたいと考えています。もちろん、全く新しい提案となると、時間・予算・物理的空間などの制約や条件もありますので、簡単には実現できないことも多いでしょうが、しかし、そうしたものがあつたことは取り上げられます。どうぞ、遠慮なく提言や問い合わせをしてください。前回大会のコメントなども歓迎します。

【大会準備委員】

学会役員＋山本智子（近畿大学）

岩谷美佐、梅下節瑠、桂田俊武、風かおる、桑田淳一、塩沢宗徳、鈴木秀一、田代 順、竹之下雅代、菑沢 明、羽下大信、平野美紀、藤井佳世子、三井裕子、六波羅佐奈枝、渡辺盤生、滝野功久（代表）